

文
125 函
新 制

第一部 平安彫刻史の研究 註



# 第一部 平安彫刻史の研究

## 序論 — 目的と方法

(1) 「定家朝臣記」天喜元年二月十九日条の記載によつて、鳳凰堂阿弥陀像はこの年（一〇五三）二月、定朝によつて造立されたことがわかる。「天喜元年二月十九日、宇治殿に参す。申刻に帰洛す。御仏渡レ奉る。又六阿弥陀一体、丑刻、京と出でて、午刻仏壇に坐し奉る。すなわち此の曉寅刻に

仏壇結界に有り云々。大僧正奉仕する。次  
に行道習礼有り。楽人等参入し、歌笛を奏  
す。法眼定喬（朝）祿を給う。昨日着御す  
れし柳色の直垂一領を給う云々（原漢文  
）。

(2) 框座螺鈿文様は現在すべて失なわれてい  
るが、当初の有様は中尊寺金色堂須弥壇の  
螺鈿文様にその面影をみることが出来る。

(3) 栄華物語「音楽」および「玉の台」。

(4) 狭衣物語卷三。また今昔物語第十二「於



山階寺涅槃會語第六に、山階寺の涅槃會の儀式を貴族たちは「極樂もかくやあるらん」といひ、榮華物語第十七「音楽」に、法成寺の供養莊嚴のさまを「ただ極樂もかくこそほ」といつてゐることも参考になる。

2

(5) 鳳凰堂が常行三昧の場として使用されたのではないかという疑問に対しては次の三点をあげれば足りる。(1) 堂内の構造は通常の方三間の構造をもつ常行三昧堂の場合と

(序論 — 目的と方法 — )

相違して、方形仏壇を内陣後寄りに構え、  
仏像の背後に比して比較的大きいスペース  
を前面にしつらえていること。加えて(四)仏  
背後に後壁を構え背後の空間を遮断したこ  
と。いいかえると後壁によって背面をしき  
ることは仏像の背後にある空間を否定する  
ことであり、その結果堂内に入る者は正面  
(前方)に広がる空間とのみ関連をもちう  
ることを意味する。このことは(一)とともに  
この堂内では修業者が阿弥陀仏の周囲を

行道する常行三昧という行為は予想されて  
 いなかつたこととを物語る。むしろ(一)鳳凰堂  
 の前面に広がる池の対岸に小御所と呼ばれ  
 る建物があり、貴族たちはこの小御所から  
 池越しに法会を行つたとする記録(「中右  
 記」元永元年閏九月廿一日条)、あるいは  
 後冷泉天皇の平等院参詣のときには正面「  
 池上に錦繡の飯屋を架して」鳳凰堂を礼拝  
 したという記録(「扶桑略記」治暦三年十  
 月五日条)からすれば、平安貴族たちは鳳

(序論 一目的と方法一)

鳳堂やその周辺の「絵のような」景觀をそのまま西方阿弥陀浄土の情景として受けとり、池畔の小御所や池上の飯屋にあって阿弥陀仏を拜するとき、彼等はとりもなおさず阿弥陀の極楽浄土に生きているという喜びを味わっていたと考えたい。

⑥ 第五章に「付論」として、鳳凰堂における仏像の「場」を含めて飛鳥時代より藤原時代にいたる仏像彫刻の展開を、それらの彫刻が安置されている建築空間の構造と関

連  
させ  
て概  
観し  
た。

(序論 一目的と方法一)

第一章 平安前期作風の形成

第一節 天平時代（奈良時代）以前

の概観

5

(1) 薬師寺をはじめ天武天皇九年（六八一）  
、妃（のろの持統天皇）の病氣平癒を祈願  
した天武天皇によって藤原木殿に建立され  
たが、天武天皇の死後、持統、文武の三代  
にわたって造営事業が引きつがれ、本尊薬  
師三尊像が南眼したのは文武元年（六九七

(第一章 平安前期作風の形成)

このことである（『日本初紀』）。のち平城京遷都にともなって寺は平城西の京の現地に移されたので、現存の薬師三尊像が創建当初の造立か、平城京移建後の新鑄なのか（新鑄とすれば養老年間、七一七一—七四一の造立が考えられる）なお定説をみない。ここでは次の二点から平城京新鑄説をとった。（一）木殿薬師寺が創建された天武九年（六八一）前後の造立にたる彫刻遺品には、天武十四年（六八五）の山田寺仏頭（現興



福寺)、およびほぼ同年造立の当麻寺弥勒  
 坐像がある。白鳳の様式をもつこれら二彫  
 刻に比して薬師寺像の様式的特色は本文で  
 詳述のように調和と均衡の精神が顕著であ  
 り、両者が同時代の造立になるとはとうて  
 い考えられぬこと、(二)は、薬師寺本尊の  
 台座(榿座)にあらわされた四神(青竜、白虎  
 、朱雀、玄武)についてである。四神をあら  
 わした銅鏡はすでに弥生、古墳時代から  
 出土をみるが、この四神思想が正式に宮中

(第一章 平安前期作風の形成)

の行事として取りあげられたのは、それほど古いことではない。続日本紀大宝元年（七〇一）春正月朔の条に「天皇大極殿に御し朝を受く。其儀正面に於いて鳥形の幢を樹つ。左日像、青竜、朱雀、右月像、玄武、白虎像」（原漢文）とあることよりすれば、四神思想の採用はこの時が初例であったと考えてよい。天皇の発願であり官寺としての性格をもつ薬師寺の本尊台座に四神がとりあげられたのも大宝元年（七〇一）

以後と考えるのが穏当である。

(2) 天平十九年正月八日の年記をもつ「金光明寺造物所解案」(正倉院文書)に、この不空羅索観音像と思われろ観音像の光背柄の材料(鉄二十挺)を請求していることから、ほぼ天平十九年ごろに造立されたと考えろのが通説である。

7

第二節 九世紀彫刻の多様性

(第一章 平安前期作風の形成)

(3) たとえば、金森遵氏「貞観彫刻の諸流」

(日本彫刻史要所収)、小林剛氏「貞観彫刻の様式に關する一考察」(日本彫刻史之研究所収)、佐和隆研氏「貞観彫刻における二つの作風」(国華八〇〇号)、西川新次氏「天長・承和期のみほとけ」(角川世界美術全集、平安I所収)、毛利久氏「多彩な貞観期の彫刻」(角川世界美術全集、平安I所収)など。

(4) この像は、あるいは釈迦如来坐像であるか。

(5) これら諸像を制作した技術家としては、奈良時代の造寺・造仏の中心機関であった造東大寺司に所属して活躍していた仏師、そして造東大寺司廃止後は、南都寺院を中心として引きつづき活躍の場を見出している。た伝統的仏師を背景に推定することもできるだろう。『隆寺来由記』によれば、隆寺講堂阿弥陀如来坐像の造立に関与した

(第一章 平安前期作風の形成)

のは大安寺僧賢証であつたといわれ、こ  
でも、南都寺院に存続した天平的伝統のつ  
よい技術と技術者によつて制作されている  
ことかわかる。

(6) ふるくは「顯教様」という名跡でよばれ  
ることがおおかたようである。

(7) たとえば、久野健氏「大仏以後」へ美術  
史ニ六号)のようによつて、天平時代の後半期か  
らしだいに抬頭してきた民間の木彫にその  
起源を見出さうとする説もある。

(8) 第一章第三節「木彫の成立」参照

(9) ただ技術者の問題については、現存する遺品のなかで密教的作風のもっとも原初的な姿をのこすと考えられる東寺講堂諸像、および観心寺如意輪観音像などの技術的特色に、奈良時代後半期の乾漆像の技術的特色とちかいものがあり、したがって、天平彫刻の技術的伝統をうけついでた諸仏師が、新来の密教圖像や仏画、あるいは彫刻の雛型を学んで、密教的作風というあたらしい

(第一章 平安前期作風の形成)

彫刻作風の創造をほたしたと考えることが  
穏当であろう。この問題については、西川  
新次氏の同様の指摘がある（「東寺講堂の  
諸仏」(国華七八二―三)、「天長・承和  
期のみほとけ」(角川美術全集、平安I所  
収)。

(10) たとえば、前掲諸論文、金森遵氏「貞観  
彫刻の諸流」、西川新次氏「天長・承和期  
のみほとけ」、毛利久氏「多彩な貞観期の  
彫刻」など。



第三節 木彫成立の問題

(11) 松本雅明「弘仁彫刻の起源」(国華 第

七—八、七—九、七—一—号)

(12) 遺品としては東大寺三月堂本尊不空羅索

観音像の宝冠化仏にこの衣文形式がみられ  
る。この形式は如来立像の場合にのみ表れ  
るべきものであり、天平時代、あまりこの

(第一章 平安前期作風の形成)

衣文の形式が見当らないのは、作風上の観点からではなく、この時期にはなぜ如来立像が造立されなかったかという圖像上の問題から考慮されなくてはならない。

(13) 久野健「大仏以後」(美術史ニ六号)

(14) 松原三郎「中国仏教彫刻史研究」中国彫刻の展開については、おおむね右に従っている。

(15) 松原氏は前掲書において「五台仏光寺天  
宝十一年(七五三)銘釈迦如来坐像」及び

「西安出土如来立像」を挙げておられる。

(16) 唐招提寺大鏡第十冊第一、第二。

(17) 唐招提寺大鏡第三冊第六。

(18) 唐招提寺大鏡第三冊第七。

(19) 唐招提寺は宝字三年に創建されたが、そ

の当初は現在のような大伽藍としてではな

く、鑑真和上の一私寺の形をとって出発し

たと考えられる。この木彫群はその私寺時

代の諸像であつたろう。現金堂の諸像の成

立は、その時期より幾らか降つた頃に置く

(第一章 平安前期作風の形成)

べきであろう。

(20) 唐招提寺大鏡第九冊第三、一宝生如来像

レ

(21) 唐招提寺大鏡第三冊第八。

(22) 唐招提寺大鏡第三冊第四、第五。

(23) 唐招提寺大鏡第七冊、木像破損仏像其二

の左。この地藏菩薩像自体は平安時代初期  
の制作と考へるべきものかも知れない。し  
かし、天平時代の民間の木彫については、  
従来、文献上のみで指摘されなから作品の

上では確かめられなかった。この状態では  
問題は具体的に進展する可能性はまったたく  
閉じられているというべきであろう。その  
意味から、天平時代の民間の木彫は、この  
唐招提寺地蔵の如く技術的には拙劣ではあ  
るが、その表情には言いようのない呪術的  
とも言うべき力強さを持っている木彫では  
なかったか、とその作風を設定する事によ  
り、問題が具体的に進展する可能性が開け  
るというべきであろう。

(24)

そのうち中央から地方への伝播については、例えば、右京三条三坊に本貫を有する「従六位上於伊美吉子首」が下野国薬師寺造司工に下向していた記録（大日本古文書一ノ四八一）などがかかれ、また、中央・地方間の技術の交流については、例えば、筑前大宰府附近の豪族に出自を持ち、造東大寺司における造営に参加していた「銅工宗形石麻呂」が、大宰府の造営に際して、再び下向して作業に従事した事実（大日

本古文書五ノ四六四）などがその間の事情を明瞭に物語っている。

13  
(25) 天平時代における民間の木彫の精神性を、『日本靈異記』にあらわれる仏教・仏像に対する呪術的な信仰のみではなく、やはリ天平後半頃から盛んになる雑密の広い背景において捉える必要がある。雑密の造像は天平時代の中頃から始まり、東大寺三昧堂不空羅索観音像はその早い例である。降つては、西大寺資財帳により多くの密教

(第一章 平安前期作風の形成)

像が造立されていったことが知られる。雑密  
に對する關心は、天平後半以後の時代的傾  
向をなすものとしての大きい背景として捉  
えられねばならない。雑密は元來、著しく  
現世利益的傾向が強く、こうした仏教に對  
する關心の仕方、民間の呪術的信仰と結び  
ついて、民間の造像を大きく展開させたと  
考へるべきであらう。



第四節 密教彫刻における曼荼羅的

構成の一例

——東寺講堂における教義と  
その表現

(26) 足立康「東寺講堂とその真言仏像」(日本彫刻史研究所収)。源豊宗「密教美術史上の東寺講堂」(仏教美術十七号)。

(27) 足立康、前掲論文。佐和隆研「日本の密教美術」。

(第一章 平安前期作風の形成)

(28) 源豊宗、前掲論文

(29) この文書については、昭和三十八年度美術史学会全国大会（於関西学院大学）において、京都府教育委員会文化財保護課中野玄三氏が紹介されている。

(30) 石田茂作「写経よりみたる奈良朝仏教の研究」。

(31) たとえば、「東大寺要録」によれば奈良時代後半頃に、千手堂、羅索堂その他の堂があつたことがわかる。また、石田茂作①

前掲書参照。

(32) 東宝記第一。なおこれに類似する形式は、勝持寺蔵薬師如来坐像光背にみることができると。

(33) 東宝記第一。御遺告。

(34) 東宝記第一。

(35) 講堂諸尊の造立が発願された機と、仁明

天皇の御不予（天長十年）と推定する説がある。赤松秀俊「初期の東寺」仏教芸術第

四十七号。

(第二章 平安前期作風の形成)

(36) 続日本後記、承和六年六月十五日条。

(37) 続日本後記、承和二年二月廿一日条。

(38) 源豐宗、前掲論文。また東室記によれば

講堂諸尊の構成は中国青竜寺の諸尊の配置を模倣する形式ともいわれ、したがってこの東寺講堂諸尊の構成が、直ちに空海の創意に出るものとはいえないが、この構成と、東寺の中心堂である講堂諸尊の配置として採用したのがほかならぬ空海であったことを考えると、その構成のもつ教義的意

味が空海の理想に適うものであったと判断してよからう。

(39) 「諸寺縁起集」興福寺縁起の条。中仏殿の弥勒浄土変は養老五年に造立された。

(40) 文化財保護委員会「国宝事典」解説その他、角川美術全集「日本」の久野健、毛利久の解説など。

(41) 東宝記第一、講堂の条。

(42) 現存する例では、安祥寺五智如来像の印相に近いようである。

(第二章 平安前期作風の形成)

(43) その典型的な例は弥陀の定印である。この印相のかたはなによりも禅定を示すかたちであるが、同時に完全に左右対称であり、加えてそのかたは自体非常に優雅な印象をもっており、慈悲深く崇高な弥陀の本誓をあらわす象徴として最もふさわしいと考えられたからであろう。

(44) この問題については、蓮実重康「弘仁貞観の美術」及び「東寺の講堂の彫刻を中心として」(仏教芸術四十七号)に論じられ

ている。

(45) 薬師寺金堂薬師三尊像の中尊など。

(46) 法隆寺金堂釈迦三尊像の中尊など。

(47) 同形式の像では、九世紀前半の制作と推定される西大寺十二天画像のうちの梵天像の形姿がこれに酷似し、また醍醐寺蔵十天形像も同じ図像的特色を示している。

(48) 帝釈天像は後世の補修が著しく、どこまで当初の姿を残しているか不明である。多く言及することとを避けたい。

(一章 平安前期作風の形成)

(49) 西川新次「東寺講堂の諸仏」国華七八二

一三。

(50) 足立康「興福寺十大弟子及び八部衆像の制作年代」(日本彫刻史の研究所収)。

(51) 脱活乾漆像の内部に組み入れられる杵は、頭部から脚部に至する垂直の柱を支えとしており、運動的な姿や左右に広がる形式の像には適志してはいない。

(52) 第二部第一章「天平時代における造東大寺司の工人組織について」参照。



(53) 帝釈天像も除く。(註48)参照。

(54) たとえば、正智院不動明王、興福寺仁王像など。

(55) 上野照夫「インドの美術」。佐和隆研「密教美術」。「密教美術論」。

(56) 上野照夫、前掲書。

(57) その点、例えば正智院不動像のように、忿怒の表情を極度に誇張するやり方とはま  
つたく違っている。

(58) 脇面は補作である。西川新次「前掲論文」。

(第一章 平安前期作風の形成)

(59) 西川新次、前掲論文。

(60) 「公南された東寺の美術（座談会）」  
『仙教美術』四十七号。

## 第二章 和様彫刻の成立

### 第一節 十世紀彫刻の諸相 (一)

(1) 現存遺品では、いうまでもなく、天喜元年(一〇五三)造立の鳳凰堂阿弥陀如来坐像の作風をその典型としている。

(2) 近年では、たとえば、毛利久氏「康尚と定朝(国華八四八)」<sup>1)</sup>がある。

(3) この問題については、第三章第一節「鳳凰堂阿弥陀像の作風的特色」<sup>2)</sup>で考察する。

(第二章 和様彫刻の成立)

(4) 延暦年間制作が推定される神護寺薬師立像の作風の、先行的意味をもつ唐招提寺講堂木彫群は、天平末期、鑑真の来朝とともに将来された中国晩唐の彫刻作風である。と考えるのがふつうである。なお、この問題については、第一章第三節「木彫の成立」で考察した。

(5) 禅定寺は正暦二年(九九一)東大寺権別当平崇上人によつて開創され、長徳三年(九九七)諸堂の落慶をみたという。したが

つて、十一面観音立像が、南都寺院に存続した奈良的伝統のつよい技術と技術者によつて制作されたとする、推定も可能である。なお、禅定寺諸像については、近年、水野敬三郎氏の論考がある（ミューゼウム七一号）。

(6) 制作年代は十一世紀に入るかと推定される同寺日光・月光菩薩立像も頭部は胴部と共木で彫出し、背面を、頸以下、一材もしくは二材による「前後矧ぎ」とする構造で

(第二章 和様彫刻の成立)

ある。

(7) 毛利久氏「寄木造の形成」(美術史四三  
号)。

(8) たとえば、善無畏訳出「大毘盧遮那成仏  
神変加持経」(大日経)。および「大日経  
疏」(巻五)。

(9) この天台薬師像の形式については、第二  
章第二節「十世紀彫刻の諸相」——天台薬  
師像の形式・長源寺薬師像を中心として  
で詳述する。

(10) 善水寺薬師如来坐像は、胎内納入願文の記載によつて正暦四年(九九三)の造立が考えられる。

(11) 因幡堂縁起によれば、創立当初安置の本尊は、長徳三年(九九八)因幡国司橘行平が任期を終えて帰国の途中同国一宮で病臥した際、夢のおつげによつて賀留津の海岸から得た薬師立像とつたえ、帰洛した行平の後を追つて京都に飛来したという伝承をつたえている。

(12) この像の詳細な構造については未調査であるが、基本部を一木から彫出する通常の一本彫成像ではないかと思われる。

(13) 真正極楽寺は、正暦五年(九九四)一条天皇の勅願により戒算上人が南基、はじめ吉田神楽岡の地に南創されたが、その後数度移転とかなね、現地の伽藍は、元禄五年(一六九二)回禄後の建立とつたえている。

(14) 東寺食堂千手観音立像については、聖宝



・會理と関連させて、拙稿「平安初期における工人組織に関する一考察」(南都仏教十九号)でふれたことがある。また、東寺千手像をめぐる論考には、西川新次氏「聖宝・會理とその周辺」(国華八四八)がある。

(15) 東寺講堂諸像における密教的作風の問題について、第一章第四節「密教彫刻における曼荼羅的構成の一例——東寺講堂諸像における教義とその表現について」で考察

した。

(16) 井上正氏「遍照寺の彫刻と康尚時代」  
国華八四六号。

第二節 十世紀彫刻の諸相(二)

——天台薬師像の形式・長源  
寺薬師像を中心として——

(17) 第一章第二節「九世紀彫刻の多様性」。

(18) これら諸像の史的位罫について、第二章第三節「和様の形成」で考察する。

(19) 同聚院不動明王像の史的位罫については、第二章第三節「和様の形成」で考察する。

(20) 長谷・岩倉地区の古寺については、

岩郡誌及各村誌、

概誌、

京都府寺院明細帳、

合資料館蔵を参照した。いずれも明治初年から中期にかけて寺の古記録や伝承を集

(第=章 和様彫刻の成立)

成したものである。

(21)

いま長源寺には寺額一基がつたわり、背面に「洛之右長谷里八塩岡峯下／阿弥陀堂長源教寺住持／格元寄進／江南沙門光春禪衲居干／北野醉月亭／承志壬辰年十二月十五日／始塔」なる墨書がある。「始塔」を「寺」を始める」と解すれば長源寺の創立は承志元年（一六五二）となる。南基の格元、寺額の筆者光春についてはわからない。八塩岡は平安期以降、紅葉の名所としてし

ばしは和歌によまれ、  
 洛陽名所集 卷之七、  
 扶桑京華志 卷之一、  
 都花月名所 卷之一、  
 北肉魚山行記 卷之一、  
 雍州府志 卷之一、  
 山東齋京土産 卷之四、  
 京師巡覽集 卷之十四、  
 菟芸泥赴 第五、  
 京羽二重 卷一、  
 山城名勝志 卷十二、  
 名所都鳥 卷第三、  
 山城名跡巡行志 第二、  
 山州名跡志 卷之六などに引かれて  
 いるが、その所在について  
 はすでに正確な伝承を失  
 っている。上記の文献の多くは  
 「長谷のう

(第二章 和様彫刻の成立)

之の山」とあり、また「山城名勝志」第十  
二は「土人云長谷聖護院宮御山荘北岡山也  
」と誌し、さらに大納言公任卿山荘の所在  
について割註でも、「土人云旧跡今日朗  
詠谷聖護山庄ヨリ八塩岡ヲ右ニ見テ長谷川  
ニ傍テ北入山中五六町許有解脱寺跡又一町  
許至北有平地是則彼卿幽居旧跡也」とい  
ているから、八塩岡は長谷地区の北方へい  
ま上ノ町に属するにある岡をいっただ  
あろう。もっともこれには異説があり、長

源寺の住職富田竜也師は長谷の東方、得尾  
（とくのお）にある岡をいうのであろうと  
推定されている。

また富田師の御教示によれば、明治五年  
に長源寺が新たに移し建てられたという堀  
池の寺地は、元来地藏院なる一寺があった  
地であるから、長源寺を含めて長谷地区に  
散在していた五カ寺が地藏院の建物（寺地  
）に合併・吸収され、寺名のみ何らかの理  
由により「長源寺」の名がのこったと考之

(才=章 和様彫刻の成立)

た方がよい、とのことである。本文で述べたように、諸記録に長源寺が上ノ町から移建したと記すのは、この際の推移をいうのであろう。明治五年に合併した五カ寺と、併記するそれらの本尊は上表の通りである。

(22) 京都府愛宕郡岩倉村概誌による。惠尊寺の旧寺地として、富田師はいま長谷地区の西北方、「薬師」なる名をのこす田畑のあたりを想定されている。

(23) 寺門高僧伝 卷二。



無縁堂	?	阿弥陀如来 (江戸時代)
妙源庵	永禄十年	阿弥陀如来 (江戸時代)
常春庵	明德元年	十一面観音 (頭部は十世紀末、他は南北朝か)
地藏院	天正五年	延命地藏 (江戸時代)
惠尊寺	寛正四年	薬師如来 (十世紀末)
長源寺	寛正四年	阿弥陀如来 (現本尊、江戸時代)
寺院名	創建	仏像

(24) 日本紀略 後篇十。

(25) 扶桑略記 長久二年正月一日条。

(26) 日本紀略 後篇十一。

(27) 扶桑略記 長久二年正月一日条。 解脱

寺の寺地についてはすでに確かな伝承を失

つているが、長谷地区の上ノ町にある岡(

あるいはこれを八塩岡というか)にその跡

があるという。注21参照。

(28) 山城名勝志 第十二、普門寺条。

(29) 扶桑略記 永観三年二月廿二日条。

(第二章 和様彫刻の成立)

(30) 寺内伝記補録 第十三。

(31) 注 20 参照。

(32) 解脱寺はその後、天保年間ごろまでは存続しており、引きつづき寺内派に属していたことが確かめられる。『愛宕郡長谷村記録』(文政十三年より慶応三年にいたる長谷村に関する記録、写本。京都府総合資料館蔵)によると、解脱寺は天保十一年から十二年にかけて修造され、十二年七月御堂本尊の遷座が行われた。その際、大護摩を

修するに、園城寺御堂衆二名が來寺して  
る。この他に「長谷村記録」には、長谷村か  
ら円満院や聖護院内跡に供物を献じ、ある  
いは東山若王子の熊野権現、宇治三室戸寺  
本尊、因幡堂葉師等、寺内系寺院の本尊南  
扉に際して人足を提供した記録がおびただ  
しく記載されていて、長谷地区と寺内派との  
深い関係がよくわかる。八塩岡にあつたと  
いふ聖護院内跡の山荘もすでに十二世紀に  
は置かれていたらしいから、平安後期以降

(第二章 和様彫刻の成立)

この地は聖護院の所領となっていたのか  
も知れない。

『山城名勝志』卷十二が、いまも長谷に  
のこる「長谷八幡」について「諸社根元記  
云、長谷八幡、長谷、花園、中村三郷氏神  
末社、急ひすかけ山大明神、山王、勸請  
由来不分明」と記していること、また『山  
城名跡巡行志』第三が、長谷地内の字「時  
尾」ときのおしについて、「在八幡宮ノ  
北岡ノ上、伝云古在寺三井ノ別院也、有<sub>二</sub>其

鐘樓ノ趾、土人呼テトクノヲ(得尾)ト云  
フ<sub>レ</sub>と記していることも、この地と比叡山  
との關係を考ふる上で参考になる。

(33) 「空也誅」 「河内弘世」 (「日本往生極  
樂記」所収)、「為<sub>二</sub>空也上人<sub>一</sub>供養金字大般  
若經願文」 (「本朝文粹」第十三卷)。そ  
の他、空也の伝記については、堀一郎氏「  
空也」に負うところが大きい。

(34) 「伊呂波字類抄」 「山城名勝志」第十五

(35)

『明匠略伝』に「天曆二年四月、登天台

山、從座主僧正法印和尚位、延昌師事之、僧正

感其行相推令得度とある。

(36)

井上光貞氏は、「(空也の念仏は)民間

呪術宗教的性格を示している。(中略)。

民間布教者ほしぜん民間宗教と妥協せざる

をえないのであるが、空也の念仏の起源が

どこにあるうとも——それは南都以来の

伝統か、それでなければ天台の影響である

か——それが民族宗教的形態をとったもの

ほむしろ自然であり、空也の、したかつて  
 当時の民間の浄土教は、民族宗教的要素を  
 濃厚にもっているという点に特長があった  
 といえると思う」と述べているへ「日本浄  
 土教成立史の研究」一ニ〇ページ、註一  
 。

(37) 毛利久氏「六波羅密寺」。

(38) 西光寺は、その寺名から阿弥陀仏を本尊  
 とする寺院ではなかつたかとも考えられる  
 が、もちろんであるべき資料はない。今後



とも検討の要があるう。

(39) 南明寺薬師像は像高八三センチ、身体の根幹部を檜の一材から彫成、膝には同じく檜の一材を横に矧いでいる。内剣りはない。この像は釈迦・阿弥陀の左右脇仏とともに板光背をもつ像として著名であるが、薬師像の場合に限っていえば、像の損傷に比して保存度がよく、あるいは後補かとも思われる。

(40) 『大柳生村史』、『南明寺国宝建造物本

堂修理工事報告書』による。文書はいまだ  
実見してゐない。

(41) 南明寺より一里ほど北にある山林が「槇  
山千坊」の跡という。

(42) 「南明寺国宝建造物本堂修理工事報告書  
」。

(43) 薬師像の造立年代は十世紀末乃至は十一  
世紀初頭、釈迦・阿弥陀両像はいずれも十  
二世紀と推定される。

(44) 釈迦像、阿弥陀像の像高はいずれも一四

(ヤ=章 和様彫刻の成立)

ニセシキ。

(45) たとえば近年では、井上正氏「皇慶伝説  
の仏像」(「日本美術工藝」四一三、四一  
三号)。

(46) 求菩提山銅板経については、市場直次郎  
氏「求菩提山銅板経圖像私考」(「考古学  
雑誌」四〇、三)を参照した。

(47) 「叡岳要記」下。表ニ参照。

(48) 円隆寺住職室寺乘玄師の御教示による。

(49) 永島福太郎氏「大柳生の歴史」(「大柳

生村史に所収)

(50) 田中日佐夫氏は、弘仁四年十月近江国十  
一郡から灯分料油が延暦寺に貢上された際  
、甲賀郡の分が他郡の約八倍に及んだ事実  
を指摘している(『近江古寺風土記』二一  
ハページ)。なおこの他、滋賀県の寺院に  
ついては同書によるところが大きい。

(51) 横川秘宝館に寄託中。像高八九センチ、  
根幹部はヒノキ材による一木、膝は同じく  
ヒノキ材の一木を横に知り。内剣りはない



箔もすべて後補である。

(54) 像の表面は後世の補修が著しいが、当初から翻波をみせない太い襷をまじうでいたことは間違いないようである。

(55) 井上正氏「皇慶伝説の仏像——山隆寺——」  
 一〇一（「日本美術工芸」四一三）。

(56) 「本朝高僧伝」卷四十九。「元享釈書」  
 第五。

(57) 足柄に、「永仁六年、仏師法眼幸祐の  
 墨書銘がある。」

(第=章 和様周刻の成立)

(58) 田中日佐夫氏「前掲書」(一五七ページ

以下)

(59) 古橋薬師堂己高阁安置の七仏薬師像七軀  
はやはり付近にあった法華寺の旧仏と伝え  
る。制作は鎌倉初期か。立像、無彩色、浅  
いY字形の衣文線を刻み、裳裾が短く足首  
をみせることなど、根本中堂七仏薬師像と  
写したと考えられる薬師諸像、たとえば滋  
賀東光寺薬師立像、千葉松虫寺七仏薬師像  
(脇仏)などに近似している。

(60)

仏谷寺はもともと真言宗に属し、徳川時  
 代の永正十二年浄土宗に改宗したか、平安  
 時代の沿革については詳らかでない。しか  
 し付近の大寺、たとえば鳥取三仏寺、大山  
 寺、鳥根清水寺などはいずれも平安時代天  
 台宗寺院として栄えていたから、仏谷寺薬  
 師像の背景に叡山とのつながりをたどるこ  
 とも可能かも知れない。さらに検討を要す  
 る。

(61)

現大阪市立美術館寄託中。像高一二六セ



(第二章 和様彫刻の成立)

ン午、檜材による一木彫成造り、漆箔仕上げ。制作年代は十世紀中葉か。

(62) 井上正氏「飯道山の本地仏」(「日本美術工芸(四一五号)」)。地理的関係から天台との関係も想定される。制作年代は十世紀前半か。

(63) 肉身の一部に、当初のものらしい黄土がのこる。

(64) 肉身部に後補の漆箔がのこる。

(65) 久野健氏「板光背について」(「美術研

究  
一八九号

(66) 毛利久氏「室生寺金堂伝釈迦像の性格」

(67) 「日本仏教彫刻史の研究」所収

(67) 肉身は肉色、法衣は朱色で彩色している

(68) この他、記録では、永観元年(九八三)

十月、藤原兼家が横川に樂師堂を建立して  
いるが(「日本紀略」後篇七)、詳細は不  
明である。

(69) 根本中堂七仏薬師像については、西川杏

(第二章 和様彫刻の成立)

太郎氏の詳細な研究がある（「法界寺薬師  
如来像考」 「美術史」 五十六号）。

(70) ただし、法界寺薬師像の頭髪は二段の区  
別が明瞭でない肉髻で、髪際線もまぶかに  
かぶつて本論の「薬師像」に近い。法界寺  
像の頭髪形式と他の七仏薬師像にみられる  
通常の頭髪形式との違いをどのように考え  
たらよいか、今後の課題であろう。

(71) 毛利久氏「室生寺金堂伝釈迦像の性格」

(72) 本論でとりあげた薬師像のなかでは、南明寺が板光背をのこし（ただし後補か）、また善水寺像も当初から板光背であったと推定されている（現存の光背は明応の修造）。久野健氏「前掲論文」。

(73) たとえば、真正極楽寺阿弥陀像、大阪孝恩寺阿弥陀像など。とくに真正極楽寺像は翻波をみせない太い襷をきざみ、腹部には二本の曲線をあらわしている。この像は横川堂行堂の本尊を写したものとつたえるか

(オ=章 和様彫刻の成立)

ら、その点でも初期天台彫刻の形式を考へる際の重要な資料とならう。

### 第三節 和様の形成

(74) 蓮弁裏面に「天禄元年」(九七〇)の銘書がある。ただし、この墨書のある蓮弁は、もともと本像のものかどうか疑問がないわけではない。

(75) 『古今目録抄』の記載によつて、講堂が  
 移建された正暦元年を像の造立年に當てて  
 いる。

(76) 毛利久氏「運慶様式の形式」(『日本仏  
 教彫刻史の研究』所収)、および同氏「仏  
 師快慶の研究」。

(77) 『広隆寺来由記』に「日光月光菩薩十二  
 神将、比諸尊者、後冷泉院御宇康平七年甲  
 辰丹後守藤原資良、依成願造焉、供養諸尊  
 導師法性寺座主仁暹大僧都、造諸尊者、

(牛=章和様彫刻の成立)

仙工長成法橋也、比菩薩十二神将靈驗奇特不可思議也」とある。「来由記」は明応八年(一四九九)の編集である。

(78) 『中外抄』寛仁四年二月〇〇日条。

(79) 『一代要記』正暦元年の条。

(80) 『貞信公記』延長二年二月十日条に、忠平が法性寺に詣で、始めて鐘声を聞いたとある。

(81) 『貞信公記』延長三年三月〇〇日条に、忠平が延命菩薩を園せしめ、また法性寺に

五大尊を造らせたとある。しかし、寛弘三年（一〇六六）になつて道長が丈六五大尊を造立するのであるから、前者は丈六像ではなかつたのであろう。

(82) たとえば、肩から西肘にかけてなだらかな傾斜でつながるのではなく、肩の線と肘の線がはっきりと角をつくつて連なることなど。

(83) たとえば遍照寺十一面観音像で、肩部を柔軟なふくらみのある肉づけであらわした



(第=章 和様彫刻の成立)

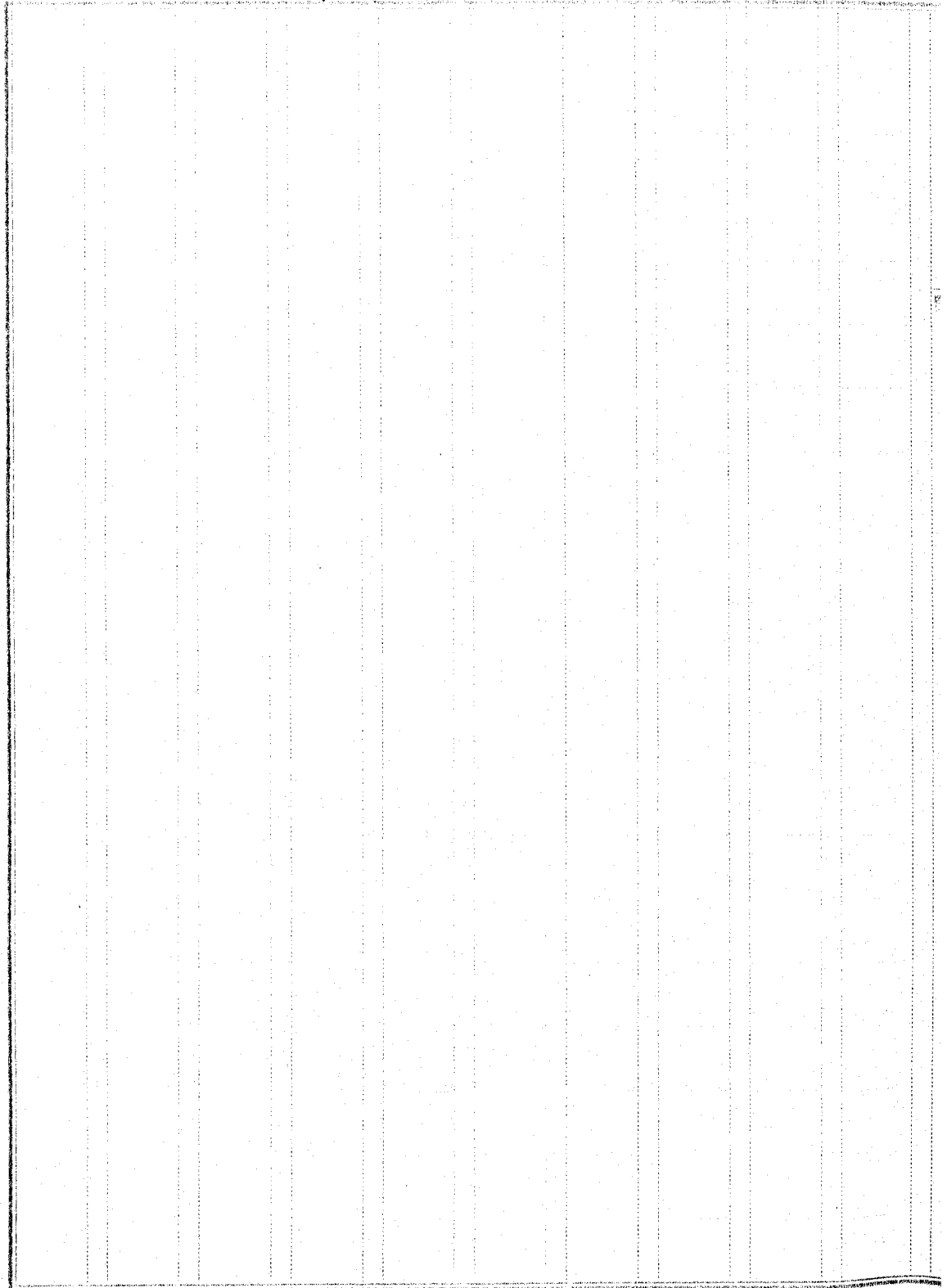
ために、肩から肘にかけて連なる輪郭に、部分的には塊量的な構成を崩すまろやかな構図と面をつくり出してゐることなど。

(84) 胎内背面左脇矧目に「寛弘□年四月十四日年次壬子年辛亥日御南眼日也過去先孝先妣成得道(下略)」とあり、寛弘九年(長和元年、一〇一二)に造立されたことかわかる。

(85) いまはそのうちの十一手かのころのみである。

(86) 胎内に納入されていた「本願薬師経」の  
末尾紙に長文の願文が墨書され、その最後  
に、「長和二年壬丑八月十二日 沙門輔静  
とある。

(第=章 和様彫刻の成立)



第三章 「和様」の考察

第一節 鳳凰堂阿弥陀像の作風的特

色

(一) 光背裏面陰刻銘には、(一)辛巳年(推古二十九年、六二一)聖徳太子の母間人皇后が死去し、(二)丁巳に翌年(六二二)聖徳太子および王后が病床についたこと。(三)他の王后・王子にらか諸臣とはかゝつて太子の病氣平癒を祈願し、かなわぬときは浄土に往登す

(第三章「和様」の考察)

るよう等身釈迦像の造立を発願したこと、

(三) 同年二月王后、太子が相ついで登遐した

こと。(四) 癸未年(推古三十一年、六二三)

発願の釈迦像を完成、作者は司馬鞍首止利(息)であつたこと等を記している。この銘文については疑問視する論者もないではないが、一般には認められている。

飛鳥様式に属する在銘像では六二三年の法隆寺釈迦三尊像について、戊子年銘(推古三十六年、六二八)を有する法隆寺宝蔵

釈迦三尊像、辛亥年銘（白雉二年、六五一）を有する東京国立博物館観音像などがあるが、後者二像とも前者に比して幾何学的形式が後退し細部の造形にも形式化・簡略化が進んでおり、金堂釈迦三尊像以後、飛鳥様式の諸特徴は次第に衰退していったと判断できる。その意味から金堂釈迦三尊像を飛鳥彫刻の典型として例にあげた。

(2) 現状の両脇侍像の組合せはいつの時代か左右逆になったと考えられる。両脇侍像の

(第三章「和様」の考察)

天衣は右左それぞれ長さが異なっており、現在の脇侍像の組合せでは向って右脇侍の右天衣が短く左天衣が長い。それに対して左脇侍の右天衣は長く左天衣が短い。つまりそれぞれ内側の天衣が外側の天衣よりも長いのであるが、それらは現状では本尊の懸裳の裏面にかくされて天衣を長くつくったことの意味を失っている。もし両脇侍像を左右逆に組合せるならばそれぞれ外側の天衣が長くなり、三尊構成における三角形

構園はいつそう明晰となる。

41

(3) 彫刻史の時代区分としての白鳳時代は他の時代に比して特殊な性格をもっている。普通白鳳時代は大化改新(六四五)から平城京遷都(七一)までの六十数年をいうのであるが、そのほぼ中頃、弘文元年(六七)の壬申の乱を境とする前後半では彫刻様式の上で大きい相違がある。前半は飛鳥様式の形式的残滓がつよく、後半では次代天平彫刻への芽生えをつよく感じさせる。



(第三章「和様」の考察)

からも天平彫刻とは異なる独自の様式的特色をもっている。したがってここでは、無銘のため厳密な造立年代を知り得ないが様式的には白鳳後半期に属すると考えられる。法隆寺夢違観音像ととりあげて白鳳様式の特色を考察する。

(4) 第一章第一節の註4を参照。

(5) 天長元年九月廿七日の太政官符によれば、神護寺の前身は高雄山寺という和気氏の氏寺で最澄や空海が入山して密教道場とな

っていたが、これとは別に延暦年間（七八  
二―八〇五）に和気清麻呂が河内（所在に  
ついては異説がある）に創建した神願寺を  
天長元年（八二四）にいたって高雄山寺に  
移して合併、神護国祚真言寺（神護寺）と  
改称したものである。したがって現存の本  
尊薬師如来像の伝来についても高雄山寺時  
代からの本尊か、神願寺の本尊かなお定説  
をみない。しかしこの像のもつ塊量的様式  
の特色が平安前期の初段階に成立し、以後

(第三章「和様」の考察)

次第に衰退したとする考えは一般に認められているので、平安前期様式の典型としてこの像をとりあげることとする。

(6) 竜門賓陽洞は古陽洞とともに孝文帝および孝文皇后のために正始二年(五〇五)に工を始め、工夫八十万二千三百六十六人を使って正光四年(五二三)に完成したといふ(『魏書』釋老志)。なお中国彫刻史について、『竜門石窟の研究』(東方文化研究所)および水野清一『中国の仏教美術』

と参照した。

(7) 奉先寺は咸亨三年(六七三)高宗の命によつて南窟され、わずか三年のち上元二年(六七五)に竣工した(「唐高宗奉先寺大盧舍那像龕記并南元牒」前掲書「竜川石窟の研究」竜川石刻録録文八〇六)。

(8) 水野清一「中国の仏教美術」図版二十八。同書によれば、天竜山第四洞は第五洞(則天武后の末年、七〇〇年初頃)につぎ、第十四洞(玄宗期、七一二―五六)よりは

(第三章「和様」の考察)

幾分古いとされる。第四洞如来像にみられる様式的特徴は第十四洞右壁菩薩半跏像および脇侍菩薩立像(同書挿図九六)ではいっそう進展している。

(9) 『五台山文物』(山西人民出版社刊)。

(10) 北魏銘では、たとえば延昌二年(五一三)

一銘の石造三尊仏坐像(松原三郎『増訂中国仏教彫刻史研究』図版六六b)、あるいは無銘であるが図版八七の石造三尊仏坐像、東魏銘では、興和二年(五四〇)銘の石

造三尊仏坐像（同書図版一一一）など。

飛鳥彫刻の直接の手本となった中国彫刻は石窟寺院の巨大石仏よりも、むしろ船載可能なようにした小石仏像でなかったかと考へる方が穏当かも知れない。これらはいずれも像高三〇センチ乃至一五〇センチである。

(ハ) 本尊の向って左神王は右手をあげて小塔をもつので四天王の一つ北方多聞天（毘沙内天）と判明するが、~~左~~神王像の尊名は不

(第三章「和様」の考察)

詳である。

(12) 天平彫刻の歴史は初期の代表作である薬師寺薬師三尊像(養老年間、七一七一—二四一)にはじまり、中期の東大寺三月堂不空羅索観音像(三月堂の建立年代から推定して天平勝宝元年(七四九)前後の造立が考えられる)を経て後期の宝亀年間(七七〇—七八〇)の造立が推定できる唐招提寺金堂盧舎那仏にいたる展開としてあとづけうる。薬師寺像において完成した調和と均衡の

精神は中期の東大寺三月堂像においてもなお基本的に指摘可能であるが、上半身の量感を一つの塊りとしてとらえるいわば塊量的把握の芽生えをすでにみせはじめていることも看過できないのである。この調和と均衡を破る新しい志向の芽生えは後期の唐招提寺像ではいっそう顕著となり、上半身とくに胸部の量感を他の部分に比して著しく強調している。この量感におけるアンバランスな表現は、やがて次代平安前期彫刻



(第三章「和様」の考察)

につながる新しい様式的志向なのである。  
以上の天平彫刻の様式的展開のなかに東大  
寺戒壇院四天王像を位置づけるならば、本  
文で詳述するように調和と均衡の精神はな  
お明瞭に指摘できるから薬師寺三尊像から  
東大寺三月堂像にいたる過程の、東大寺像  
に近い時期（八世紀中葉、七四〇年前後）  
に置くことができよう。天平彫刻の様式展  
開については、拙稿「日本上代彫刻史にお  
ける天平後期彫刻の位置」(『大寺前女子

大学論集』I、一九六六)で論じたことがある。

(13) 現存の遺品に限って考えるかぎり、日本において超越者と造形的に表現した初例が、まず縄文時代の土偶という彫刻であったことも参考になる。

(14) 西洋ゴシックのキリスト教会においては、一般的に、天井はりぐを活用し尖頭形のアーチを組んで上昇運動をもち、柱の構造もそえ柱の効果を活用してこの上昇運動に

(第三章「和様」の考察)

いっそう加速を与えている。さらに壁面の多くを多彩なステンドグラスとし、天上から下へ光の神秘性を強調した。この教会建築内部における垂直方向の印象と光の源である無限な高さ・遠さへの印象こそ、当時の人びとにとって神の實在感であったに違いない。

(15)

たとえば、インドのいわゆる無仏像時代（紀元後一、二世紀以前）において仏足、菩提樹、ストウパ、法輪などの形象を用い

て釈迦とあらわしたことなど。

(16) 飛鳥彫刻も北魏彫刻も、厳密な意味では彫塑性を彫刻の基本構造としていたとはいえないが、いずれも次代以後において彫塑性を自覚し、彫塑性を多様に展開させるという志向を内在していたという意味での過程における一様相と考えたいのである。

(17) 一般にいわれているように、平安初期における一木彫成像は素材として一木を用い

(第三章「和様」の考察)

たので、頭から足まで一本の木材から彫り出したので、その結果堂々たる塊量的量感が生れてきたというふうなものではない。

藤原時代には、一木を素材としていても平面的量感を特色とするいわゆる定朝様の作品は多いのである。平安初期彫刻の迫力は、素材として一木を用いたから生れたのではなく、仏師が、あるいは平安初期の人びとが一木という材をもつどっしりとした量感と重量感をよしとして、その迫力を生か

すような彫刻をつくったからだと考えたい。  
 要するに、なにに美を見出したかの問題  
 である。この問題は、第三章第四節「寄木  
 造りと藤原様式」で詳述する。

(18) 遣唐使廃止後も中国像の断片的な伝来は  
 あった。永延元年(九八七)喬然が宋より  
 釈迦像、十六羅漢画像を伝え(扶桑略記、  
 作品は清涼寺に現存)、正暦二年(九九一  
 )喬然の弟子がやはり宋より文殊像を請来  
 し(日本紀略)、時代は降るが大治五年(

(第三章「和様」の考察)

一一三〇) 宋より伝えられた法服地蔵(着物をつけて地蔵像)を仏師院覚が鳥羽上皇に献上した記録(長秋記)もある。しかしこれら中国彫刻の日本彫刻史に及ぼす影響は、少なくとも十世紀から十一世紀ごろまではとりあげるべきものはない。

(19)

寺伝によれば、禅定寺は正暦二年(九九一)東大寺権別当平崇上人によって開創され、長徳三年(九九七)諸堂の落慶をむけたという。十一面観音像の制作年代をあきら

かにする直接資料はないが、様式的にみて  
 禅定寺南創の時期に当てて大差はない。な  
 おこの像を含めてここにあげる三彫刻につ  
 いては第二章第一節および第三節で考察し  
 た。

(20) 真正極楽寺(真如堂)は正暦五年(九九  
 四)一条天皇の勅願により戒算上人が南創  
 じめ、吉田神楽岡の地に南創されたが、  
 その後数度移転をかすね、現地の伽藍は元  
 禄五年(一六九二)回禄後の建立と伝える



(第三章「和様」の考察)

。真正極樂寺像の制作年代を推定する文献資料はないが、この像の作風的特色から真正極樂寺の創建時を造立年代に当てて大差はない。

(2)

遍照寺は永祚元年（九八九）左沢流の大成者寛朝が南創した寺院で、当初は嵯峨左沢池の池畔、遍照寺山のふもとにあったという。この像の制作年代を推定する文献資料はないが、様式的特色から遍照寺創建当時の制作と考えて大過ない。

(22) 九世紀以降、十世紀を経て十一世紀中葉の和様の成立にいたる様式史的展開については、第二章第一節および第三節で考察した。その論旨を略述すれば左の如くである。

・ 京都・奈良を中心とする彫刻遺品約五十点を調査し、それらを「奈良様」「木彫様」「檀像様」「密教様」の四つの様式的類型に分類してそれらが九世紀以降十一世紀初頭にいたるまでどのような展開をとげたかを考察した。結論として、(一)四類型とも

(第三章「和様」の考察)

十世紀後半以降、像の細部、とくに相好、  
着衣などの表現に「優美なもの」「おだや  
かなもの」への志向が顕著にあらわれはす  
るが、量感の構成の仕方では、なお九世紀  
の塊量的量感の把握が根強くなっている  
こと。(=)したがって十一世紀中葉の定朝に  
よる和様は、これら九世紀の伝統を根強く  
のこす四類型のいずれの系譜からも直接生  
れるものではなく、定朝の新様式を生ま出  
す可能性はまったく別の基盤に求められる

べきであることを結論した。そこでただちに問題になるのは定朝の父と伝える康尚との関係である。記録によれば、定朝は寛仁四年（一〇二〇）法成寺無量寿院の仏像造営では父康尚に弟子としてつかえて父康尚の様式を身をもって学んだはずであるからである。康尚の事蹟は文献上から比較的に知られ、正暦二年（九九一）祇陀林寺丈六釈迦如来像の制作をはじめとして、定朝とのいわは合作ともいえる法成寺無量寿院

(第三章 「和様」の考察)

の造仏（一〇二〇）にいたるまでおよそ三  
十年間の活躍がわかるが、確証のある康尚  
の遺品はない。ただ、いま東福寺同聚院に  
のこる木造不動明王像が寺伝にいう法性寺  
五大堂五大明王の一体とすれば寛弘三年へ  
一〇〇六の造立となり、年代的に仏師を  
康尚に当てうる可能性は大きい。この像は  
一〇〇〇年前後の前述数体の彫刻に比較  
すれば立体的量感の後退は著しく見る者を  
圧倒するものとしての實在感の拭払も

進んでいる。したがって定朝は、父康尚の彫刻様式のなかに芽生えていた新たなものへの志向を受けつぎ、その様式的芽生えを明確な形式まで高めることによつて定朝独自の様式を完成したのではないかという観点から今度「和様」成立の問題は考察されるべきであろう。

(23)

たとえば、長承三年二月十日源師時は鳥羽勝光明院造仏の参考にするため仏師院朝と招具して西院故邦恒朝臣堂に向い定朝作

(第三章「和様」の考察)

として評判の高かった丈六阿弥陀仏の寸法を六十四カ所にわたって測量させた。その際の記録を師時は、「長秋記」に「比所仏師定朝有造仏、天下以是為仏本様」と記している。また同年の「長秋記」は、やはり師時の命を受けて仏師賢田が鳳凰堂丈六阿弥陀仏を模写し各部を詳細に測定したことも伝えている。

第二節 藤原様式と定朝様

(24) 源豊宗氏 「藤原彫刻の諸問題」 (「仏教美術」第十冊)。

(25) 渋谷二郎氏 「仏像彫刻・藤原時代後期」 (「日本美術史大系」第二巻、彫刻編) 所収)。

(26) 小林剛氏 「藤原時代の彫刻」 (「平凡社世界美術全集」第十五巻、日本Ⅱ) 所収)。



(第三章「和様」の考察)

(27) 久野健・猪川和子氏「藤原彫刻の展開」

「角川世界美術全集、第五巻、日本」5

「所収」。

(28) 渋江二郎氏「前掲論文」一五四頁。

(29) 註(28)と同じ。

(30) 渋江二郎氏「前掲論文」一五五―一五六頁。

(31) 藤原彫刻の歴史と複数の彫刻系譜におい

て考察しようとする論者には、ここで紹介

する二説のほかにも金森遵氏がいる。金森氏

は藤原彫刻の特殊な事情について、「藤

原彫刻は当然のことながら単純な流れではなかつた事が知られる。併し、それらの諸流が、例之ば貞観彫刻に於ける場合のように、純然たる様式史的要因に歸するのではなく、像の所在地或いは製作地の都鄙の別に殆どよつてゐる事は、藤原彫刻の様式的性格を明示するものであつて、此の時代の初頭に於ては殆ど単一の様式として受け継がれた貞観様式が、地理的事情によつて若干の分流を生じたに過ぎないという事は、

(第三章「和様」の考察)

藤原彫刻が様式的には自律性を欠いていた  
実情を物語るもののものである」(「日本  
彫刻史要」一六八頁)。

(32) 久野健・猪川和子氏「前掲論文」一七一  
頁。

(33) 久野健・猪川和子氏「前掲論文」一七三  
頁。

(34) 註(32)と同じ。

(35) 渋江二郎氏「前掲論文」一五四頁。

(36) 註(29)と同じ。

(37) 渋江氏の論考では、一般に「形式」と「様式」の区別が不明確であるが、この問題については深く立ち入らない。また渋江氏が藤原様式を「平明性、優美、平面的」の三点から規定していることは本文で述べた通りである。

(38) 金森遵氏「前掲論文」一七二―三頁。

(39) 金森遵氏「前掲論文」一八二頁。

(40) 註(38)と同じ。

(41) 註(39)と同じ。

(42)

鳳凰堂阿弥陀像に藤原彫刻の典型を見る  
源豊宗氏が、なお「鳳凰堂の時代には、ま  
だ貞観的な余韻が、色々な方面に残って  
たのである。定朝の阿弥陀像に於ても、そ  
の相好の表現には一種の内面的な重々しさ  
が感じられるのであるが、それは藤原初期  
の仏像に共通する一つの様式であつて、こ  
れも貞観的余韻として理解されるのである  
」と説くことは注目される。「鳳凰堂の絵  
画性」六「古美術見学」所収、一九三頁)

(43) 鳳凰堂像の周辺にある天部像（たとえば

長勢作広隆寺十二神将像）や、地方的作例  
 （淡江氏の分類によれば「定期形式以外」  
 に相当）については後日を期すこととする。

(44) 「長秋記」長承三年六月十日条。「長秋  
 記」は源師時の日記。

(45) 「長秋記」長承三年五月五日条。

(46) 註（44）と同じ。

(第三章「知様」の考察)

(47)

たとえば、寛弘四年（一〇〇七）の金剛  
峯寺大塔建立における「五仏木作、各二百  
石、彩色各三百石、総二千五百石云々」は  
大日五仏の造立であり（「平安遺文」四四  
六号）、また仁安二年六月十二日、西林寺  
新御堂に安置した「御仏」は丈六阿弥陀像  
であった（「平範記」）。

(48)

たとえば、「御堂関白記」寛弘二年十二  
月廿一日条、法性寺五大堂に関する記事「  
初作仏、各丈六、造料米五百石、送座主房

「の「仏」は五大明王像五軀である。

(49) たとえば、大治四年閏七月廿日、女院の御産と祈願して造立された「御仏」は、「半丈六木像阿弥陀五佛」と「脇土菩薩四軀」であった。「中右記」。

(50) 「長秋記」長承三年四月十日条。

(51) ただし、現存の光背は後世の補作であるが、法界寺阿弥陀像の光背形式から逆推して、当初の光背も現状に近いものであったことは充分推定できる。



(第三章「和様」の考察)

(52) ただし、この飛天像は薬師像と一具のも  
のではないという疑問もある(倉田文作氏  
「仏像のみかた」、二八二頁)。

(53) 註(44)と同じ。

(54) 鳳凰堂阿弥陀像の様式的特色については  
、第三章第一節「鳳凰堂阿弥陀像の作風の  
特色」で考察した。

(55) 左右の下膊部、持物は後補である。

(56) 左右の下膊部、手ににぎる天衣、雲の先  
端部は後補である。

(57) 両像については、「広隆寺来由記」(明治八年、一四九九)に「日光菩薩月光菩薩十二神将像、比諸尊者、後冷泉院御宇康平七年甲辰丹後守藤原資良、依成願造焉、供養諸尊、導師法性寺座主仁暹大僧都、造諸尊者、仏工長成法橋也、此菩薩十二神将靈驗奇特不可思議也」とある。また両像の名稱についてはの寺伝は左右逆である。

(58) またしほしほは六波羅密寺地蔵菩薩や淨瑠璃寺地蔵菩薩像、大倉集古館普賢菩薩像な

(第三章「和様」の考察)

ども「定朝様」に属するもの、もしくは「定朝様」の影響を受けたものとして説かれることかある(例、久野・猪川氏「藤原彫刻の展開」)。その根拠とするところは、これら諸像の調和のとれたプロポーションやおだやかな全身の輪郭にあるようである。  
・註(61)参照。

(59) 即成院阿弥陀如来像に付属する聖衆菩薩廿五体のうち、当初の十体は橘俊綱の臥見堂の旧仏と伝え、俊綱が死んだ寛治八年(

(一〇九四)ごろの作と考えられる。

(60) 醍醐寺如意輪像については詳述しないが、こまやかさの強調された愛らしい表情に特色がある。

(61) したかつて、六波羅密寺地藏菩薩像、淨瑠璃寺地藏菩薩像、大倉集古館普賢菩薩像などの諸像を「如来形以外の定朝様」とよぶのは正しくあるまい(例、久野・猪川氏「前掲論文」一七二頁)。たしかにこれらはほぼ直立し左右対称に構成される。加之

(第三章「和様」の考察)

て註(58)のように、調和のとれたプロポ  
ーションやおだやかな全身の輪郭が目立ち  
、その意味では鳳凰堂阿弥陀像の「形式的  
影響」は否定できない(如来坐像ではな  
いので、厳密な意味で「形式的模倣」とはい  
えない)。しかし、これら諸像は、総じて  
肉身部の量感に柔軟さが欠け、また鳳凰堂  
像に指摘された「肉づけの微妙な単純化」  
もなく、全身の構図にへとくに肩部の輪郭  
線に「肉身部の量感を外から拘束する」限

定的構図」の傾向をつよくみせはじめてい  
 る。「定朝様」の本質であつた「像と周囲  
 空間との微妙な均衡」はまづたく指摘でき  
 ないのである。まして峯定寺毘沙門天、不  
 動三尊像などの天部形を「定朝様の影響を  
 うけてつくられた像」とするのは（久野・  
 猪川氏「前掲論文」一七三頁）、「定朝様  
 」の内容規定をいふさう漠然とさせる。ち  
 なみに、淨瑠璃寺地藏菩薩像、大倉集古館  
 普賢菩薩像は十二世紀前半、六波羅密寺地

(62)

蔵菩薩像は十二世紀中葉の制作であらう。

「長秋記」長承三年六月四日条、「付其御仏面可奉俯、又御衣頗荒候、於其賢田(仏師)皆存、可奉直之由所令申也、随御感(下略)」。

第三節

定朝様と「定朝様の影響を

うけた彫刻」との関係

(63) たとえば、久野健・猪川和子氏「藤原彫刻の展南」(『角川世界美術全集』第五巻・日本(5)、所収)。

(64) たとえば、久野健・猪川和子氏「前掲論文」。また鳳凰堂阿弥陀像のような坐像形式の阿弥陀像にかぎらず、立像形式になる一部の如来像の「様式」にも、「定朝様」なる概念を適用してもよい、とする論者もいる。中野玄三氏は、十二世紀前半の制作になる京都地蔵院阿弥陀如来立像の解説の



(第三章「和様」の考察)

なかで、この像の特色を「浅く流れるよう  
な美しいへびだの」線」、「やさしい顔立  
ちや奥行の浅い」とくととのった体のプロ  
ポーション」などに指摘したあと、「ふつ  
う定朝様という用語は、坐像に対して使う  
場合が多いが、このような立像でも、その  
優美さは坐像の場合と同じなので、定朝様  
と呼んでいい」とのべている（『京都の文  
化財』(3)・南山城編)・鳳凰堂阿弥陀坐像  
の様式(定朝様)と立像における如来像の

様式との関連についてもなお検討する要があるが、この問題は後日を期すこととする。

(65)

久野健・猪川和子氏「前掲論文」。

(66)

たとえば、源豊宗氏「藤原彫刻の諸問題」(『仏教美術』第十冊)。渋谷二郎氏「

仏教彫刻・藤原時代後期」(『日本美術史

大系』第二卷・彫刻編)。小林剛氏「藤原

時代の彫刻」(『平凡社世界美術全集』第

十五卷・日本Ⅱ)。久野健・猪川和子氏「

(第三章「和様」の考察)

前掲論文

(67)

たとえば、小林剛氏は「これは名匠定朝のほとんど唯一ともいふべき遺作として、和様のもつとも典型的な作例であるばかりでなく、藤原彫刻のもつともすぐれたもので、その円満具足した顔かたちや、ゆうにやさしい表現などは、じつに美しい」といっている（「前掲論文」）。

(68)

「長秋記」（源師時の日記）長承三年六月十日の記事は、源師時が鳥羽勝光明院造

仏の参考にするため仏師院朝を招具して西  
院邦恒朝臣堂におもむき、定朝仏として評  
判の高かった丈六阿弥陀仏の法量を六十四  
カ所にわたって測定させたことを記してい  
る。その際の感想として、師時は「此所仏  
師定朝有造仏、天下以是為仏本様」と述べ  
ている。また同年五月五日の「長秋記」は  
、やはり師時の命を受けた仏師賢四か鳳凰  
堂阿弥陀仏を模写し各部を詳細に測定した  
こともつたえている。

(69) たとえば、中野玄三氏「藤原彫刻」(至  
文堂『日本の美術』)。

(70) 彫刻における「限定的構図」と「非限定  
的構図」については、第三章第一節および  
第二節で考察した。

#### 第四節 寄木造りと藤原様式

(71) 八世紀の後半から末にかけて造立された

と推定される唐招提寺旧講堂の木彫群、大  
 安寺木彫群、九世紀初頭の神護寺葉師立像  
 、前半の東寺講堂四天王像、後半の広隆寺  
 虚空蔵坐像、地藏坐像などはまったく内剣  
 リをほとんどしてない。

(72) 藤原彫刻における割矧ぎ造りと様式との  
 関係もすこぶる興味ある問題であるが、本  
 論ではふれずに別稿にゆずる。

(73) 寄木造りを技術的観点より論じた論考に  
 は、毛利久氏「寄木造の形成」(『美術史

(第三章「和様」の考察)

㊦四三号)、西川新次氏「阿弥陀堂と藤原彫刻」(小学館)、西川杏太郎氏「平安彫刻の木寄せ法の展開——木彫像技法研究——」トから——(「ミュージアム」二四八号)などがあり、寄木造りを藤原様式と関連させて論じたものには、中野玄三氏「藤原彫刻——とくに「藤原彫刻の鑑賞と鑑識——」——木造から寄木造りへ」の章) (至文堂)、中野忠明氏「寄木造彫刻の性質」(「史迹と美術」三七五号)などがある。

(74) 現状では、頭部の内剣りは背剣りと連続して像底まで貫通しているが、当初は、両者はそれぞれ独立していたらしい。

(75) 『修理解説書』(美術院)、および毛利久氏「寄木造の形成」による。

(76) 『修理解説書』(美術院)による。

(77) 長源寺薬師像の様式および成立の事情に  
ついては、第二章第二節「十世紀彫刻の諸相(二)——天台薬師像の形式・長源寺薬師像を中心として」で考察した。



(第三章「和様」の考察)

(78) 各材は、いま丸と角型の柄によって接合される。『修理解説書』(美術院)。

(79) 体部の背面とほぼ同じ奥行きをもつ頭部の背面部(後頭部)が前面部と共木で彫出されている(割矧ぎ)ことも、これを物語る。

(80) 西川新次氏『阿弥陀堂と藤原彫刻』。

(81) 『日本彫刻史基礎資料集成——平安時代重要作品篇一』

(82) 註80と同じ。

(83) 西川杏太郎氏「平安彫刻の木寄せ法の展  
南」(『ミューゼアム』二四八号)による  
ところが大きい。

(84) 毛利久氏「寄木造の形成」。また多くの  
論者もこの立場に立って論じている。

(85) 彫刻家松久宗琳氏から多くの御教示を得  
た。

(86) 作者は松久朋琳、宗琳の両氏。

(87) 像高五六五センチ、膝張四三・五センチ

(第三章「和様」の考察)

(88) たゞし胴部の中央二枚は頭部の柄が挿入されるためそれぞれ前後二枚に分れる。

(89) 背面はさらに六枚に分れるが、ここでは一枚としてあつかう。

(90) これのみでは彫刻として体をなさない程度の大きさばな荒彫りである。その目的はもちろん、指導的仏師の労力の軽減である。材の表面に大体の形状をえがき、数人の仏師が分業的に荒彫りをほどこす一例が、  
『長谷寺縁起』(十五世紀)中巻の五、六

段にみえる。絵巻では、四材を四人の仏師が彫刻している。

(91) 膝部を除き、根幹部の四材についてのみ考える。

(92) 十一世紀の中葉以降、鳳凰堂像に近似する形式の坐像がおびただしくつくられてい  
る。この説明として、当時、鳳凰堂像の形  
式（いわゆる定朝様）を内容とするこ  
ういう図面の如きものが多数流布して  
いて、中小工房の仏師たちはそれを  
用いて容易に

(第三章「和様」の考察)

類似の坐像をつくることができたと解する  
のも一方法であろう。

(93) たとえば、大治五年(一一三〇)造立の

住友吉左衛門氏蔵阿弥陀如来像など。

(94) 平安初期および平安後期の彫刻様式につ  
いては、第三章第一節「鳳凰堂阿弥陀像の  
作風的特色」において比較検討した。

(95) 八世紀末、九世紀初頭には山嶽信仰や雑  
密的な呪術的信仰を背景として造立された  
木彫もあったらしい。『日本靈異記』の記

事にはそのいくつかの例がうかがわれるし、  
 神護寺薬師立像の成立をその種の信仰的  
 背景において解釈する論考もある（中野玄  
 三氏「八世紀後半における木彫発生の背景  
 」、『仏教芸術』五四号）。そのなかには神  
 木として信仰をうけ、神的存在がやどる  
 と信じられた材を用いて彫刻をつくること  
 もあろう。その場合には、直ちにこの彫刻  
 観の問題と関連してくる。

(96) 十世紀以降、多くの彫刻が形式化、簡略

(第三章「和様」の考察)

(97)

註  
94

化の傾向をみせるが、その場合、根幹部前面の造形は正常の彫刻を行いながら、背面部は省略するか、簡略化をみせる像が多い。

第五章（付論） 仏像の「場」

(一) 「仏像の構造」については、序論で考察した。

(二) なお、堂内の装飾具の問題についてはこの小論の問題からはずしたい。当初の装飾具のほとんどが現存していないという理由と、その装飾状況も復原不能であるという理由のためである。「仏像」と「仏殿」との関係論に数少ない論文に、町田甲一



(才五章(付論) 仏像の「場」)

「仏像と建築」(「世界建築全集」1、日本—古代、所収)がある。

(3) 村田治郎「法隆寺伽藍史」(「法隆寺」所収) (毎日新聞社)ニニページ以下。その他の。

(4) 薬師寺は天武九年(六八〇)発願され、はじめ藤原京木殿に伽藍が建立された。その完成は持統天皇末年から文武天皇初年にかけてであったと考えられる。その後、平城京遷都にもなつて養老二年(西の

京に移されるのであるが、現存する東塔は、その際、木殿時代の塔の様式をのこして再建されたといわれ、したがって様式的に白鳳末年の特色をもつものとするのが通説のようである。福山敏男・久野健「薬師寺」一六八ページ以下。

(5) 註々、また浅野清「奈良の寺々」(「世界建築全集」日本―古代)所収。福山敏男「初期の寺院と宮殿と神社」(「角川世界美術全集日本(2)飛鳥・白鳳」)所収。

(第五章(討論) 仏像の「場」)

(6) これと同様のことは、神社建築における垣根についても指摘されるという。すなわち、井上克夫「日本上代建築における空間の研究」によれば、本殿を囲む垣根は内部と神聖な空間として仕切るための柵であって、礼拝者は内玉垣門（仏教寺院では中門に相当する）から本殿に対して礼拝するのがふつうである、という。

(7) 浅野清「法隆寺建築綜観」(便利堂)一〇一ページ。「法隆寺」(アテネ文庫)三

三ページ。

(8) 浅野清「法隆寺」。「奈良の寺々」(「世界建築全集」日本—古代—所収)。

(9) 浅野清「法隆寺建築綜観」(ハーページ)。

(10) 薬師如来坐像については、すでに三次元的表現を獲得しはじめているとする様式的検討と、後世の偽作であるとする光背銘文批判によって、推古十四年造立説はいまほとんど行なわれていない。また、阿弥陀如来坐像については、鎌倉時代の仏師康勝に

(第五章(討論) 仏像の「場」)

よって造立されたものであり、銘文によると、当初の間人親王のための阿弥陀像が盗難にあつて失なわれたため、それにかわるものとして造られたことがわかる。しかし、これが金堂創建当初、西の間の本尊として安置されていたとする資料はない。

(11) 最近では、例えば、町田甲「概説日本美術史」(吉川弘文館)一八ページなど。

(12) 本尊の造立年代については二説あるようである。一つは、大日本古文書(四ノ四二

○) に記載する鉄二十挺の請求文書「金光  
 明寺造仏所解」を三月堂本尊造立に關する  
 資料とし、その年記（天平十九年）を造立  
 年代と推定するもの、（例えは、河本敦夫  
 「天平芸術の年造力」（黎明書房）一五五  
 ページ以下。及び、小林剛「日本の彫刻」  
 （至文堂）三二ページなど）。いま一つは  
 、天平廿年の年記を有し、不空羅索神呪經  
 一卷を請求しに東大寺写經所の諸文書（例  
 えは大日本古文書十ノ三二六一七、廿四ノ

(第五章(付論) 仏像の「場」)

一七五など)、および不空羅索菩薩御料田に因する伊賀国司解(大日本古文書五ノ六ニハ)を資料として、天平末年から勝宝元年に至る時期をその造立年代とする説(例えば福山敏男「東大寺三月堂の建立に関する問題」東大寺法華堂の研究所収)の二つである。

(13) 福山敏男、前掲論文「東大寺法華堂の建立年代に関する問題」

(14) 浅野清「東大寺法華堂の現状とその復元

的考察」(「東大寺法華堂の研究」所収)

。 「奈良の寺々」(「世界建築全集」日

本「古代」所収)。

(15) 福山敏男「真言天台の寺院」(「世界建

築全集」日本「古代」所収)。

(16) 西大寺資材流記帳(寧楽遺文中ノ三九六  
)に次のようにある。

○十一面堂院

檜皮葺雙堂二字

長十一丈五尺 広十丈五尺

善頭在龍舌廿八枚



(第五章(付論) 仏像の「場」)

○四王院

檜皮葺雙堂

各長十二丈雙広八丈六尺  
善頭在龍舌廿八枚

(17) 浅野清、前掲論文「東大寺法華堂の現状」とその復元的考察。

(18) ただし、日光・月光西菩薩像は、その材質、法量などの違いから客仏と推定されている。

(19) 註17に同じ。

(20) 註17に同じ。

(21) 唐招提寺金堂の創建年代については諸説あつて一定しないが（例えは、鑑真在世時代とする小林剛、毛利久説、室字年間とする安藤更生説、弘仁年間とする福山敏男説など）、いずれにせよ様式的には天平末期の特色をもつものと考えてよいであらう。

(22) 浅野清「唐招提寺の主要堂塔の配置と沿革」(「唐招提寺」近畿日本鉄道、所収)

(23) 註 22 に同じ。

(第五章(付論) 仏像の「場」)

(24) 礼堂は、さらに上礼堂と下礼堂とに分れて  
いた。

(25) ただし現在では寛永十七年(一六四〇)の  
改造を経て、正堂・礼堂とも一つの入母屋  
造りの屋根で葺かれている。

(26) もちろんここでは、その技術的・構造的  
系統よりも、その空間構造における意識形  
態を問題として考えている。

(27) 中世以後になると、これを板扉ではなく、  
格子に組んだ扉で仕切るようになる。これ

は面空間がより開放的関係をもちはじめた  
 こととを物語るであろう。したかつて、この  
 密教仏殿の空間構造にも時代的展開が存在  
 することが予想されるが、これはまた別の  
 機会に論ずべき問題であろう。

(28) 密教教義については、宇井伯寿「仏教汎  
 論」にしたかった。また、佐和隆研「密教  
 美術論」へ便利堂一四ページ以下参照。

(29) 東寺講堂諸尊については、第一章第四節  
 「密教彫刻における曼荼羅的構成の一例」

(才五章(付論) 仏像の「場」)

一 東寺講堂における教義とその表現」で考察した。

(30) 西川新次「東寺諸堂の諸仏」(国華七八二―三)にしたがった。さらに、後世補修の著しい帝釈天像も除いて考える。

(31) このなかで、四天王四軀は材質、表現などの違いから系統を異にするものと判断される。また註29を参照。

(32) たとえば、求法入唐のち、大同元年空海が朝廷に奉った「請来目錄」の末尾に次

のように述べている。『加うるに密蔵は深  
 玄にして、翰墨に載せ難し。更に図画を仮  
 りて悟らざるに開示す。種々の威儀、種々  
 の印契は自ら大悲に出でて、一たび觀れば  
 成仏す。経疏は秘略にして、之を圖像に載  
 せたり。密像の要は實に茲に繋れり（下略）  
 』。ここには密教教義における形象的・  
 具象的特色がよく物語られているといえよ  
 う。

(33)

井上光貞『日本淨土教成立史』（山川書

店) 八五ページ以下。

(34) たとえば、西琳寺文永注記(群書類従第

二十七ノ下)によれば、西文氏の氏寺であ  
った西琳寺(河内国古市郡)には斉明五年  
(六五九)造立の阿弥陀如来坐像が安置さ  
れていたというし、また、大阪観心寺には  
戊午年銘(六五八)を有する阿弥陀如来像  
の光背を現存している。これらの資料から  
、阿弥陀像の造立はほぼ七世紀の中ごろか  
らはじめたと判断してよからう。

(35) たとは、天平十三年建立の東大寺阿弥陀堂（阿弥陀悔過資材帳、大日本古文書五ノ六七—一八三の記載による）、および、天平宝字五年建立の法華寺阿弥陀浄土院（類聚三代格、天平宝字五年六月八日の勅による）などがみえる。

(36) たとは、註34に記載の観心寺阿弥陀如来像光背銘文には次のようにある。

（上略）「敬造弥陀仙像。以此功德。願  
 過往其夫。及以七生父母。生々世々。恒生



(第五章(付論) 仏像の「場」)

浄土<sub>レ</sub>。(下略)

右の「過往<sub>レ</sub>」はスギニシと読み、「故其夫<sub>レ</sub>」の意味をあらわし、また「及以<sub>レ</sub>」は二字で「与<sub>レ</sub>」を意味すると解されている(寧楽遺文解説下ノ一四三。及び内藤藤一郎「日本仏教図像史<sub>上</sub>」一ニニページ参照)。すなわち、奈良以前の阿弥陀信仰は、死者をして極楽浄土に往生させようとする来世に對する信仰と解することができよう。また井上光貞「日本浄土教成立史<sub>上</sub>」(第一章

律令時代における浄土教）参照。

(37) 宇井伯寿「仏教汎論」。内藤藤一郎「日本仏教図像史」。井上光貞「日本浄土教成立史」などを参照した。

(38) 山門堂舎記（群書類従第二十四輯ノ四七一）の常行三昧院の項に次のようにある。

葺檜皮五間堂一字。西在孫庇。

(39) 法照のこと（八世紀の唐に生存）。法照は五台山に竹林寺を創立、般舟道場を開いて音楽的特色をもつ五会念仏を修した。

(第五章(付論) 仏像の「場」)

(40) 法照の創立した「五会念仏」は無量寿經の所説に従うもので、極樂浄土の七宝の諸樹が清風に吹かれて五音(五種の音調)——宮、商、角、徵、羽)の声を出し、微妙な自然に相和するといふ現象、すなわち音楽的特色を念仏にとり入れたと解される。

(41) 栄華物語「音楽」および「玉の台」。また、家永三郎「法成寺の成立」(美術研究一〇四号)。

(42) 狭衣物語卷三。また「今昔物語」第十二

、於山階寺涅槃聚會語第六にも、山階寺の涅槃會の儀式を貴族達は「極樂もかくやあるらん」といひ、また、榮華物語第十七「音樂」にも、法成寺の供養莊嚴の「まを」した極樂もかくこそは」といひ、また、家永三郎、前掲論文「法成寺の成立」。

(43) たとえば「中右記」元永元年閏九月廿一日、廿二日など。福山敏男、「考古学雑誌」三四ノ九。

(44) たとえば、家永三郎「日本思想史」におけ

(第五章(付論) 仏像の「場」)

る否定の論理の発達」(弘文堂)一〇ページ以下。

(45) 井上克夫、前掲書「日本上代建築における空間の研究」。

(46) 仏教思想については、宇井伯寿「仏教汎論」、中村元「インド思想史」、岩本裕「仏教入門」などを参照した。

(47) 読み下し文は、岩本裕「仏教入門」による。以下同じ。

(48) たとえば、十七条憲法の条文、および三

經義疏などが指摘できるだろう。家永三郎  
「日本思想史における否定の論理の発達」

(第五章(付論) 仙像の「場」)